第６学年１組　国語科学習指導案

令和６年　９月２６日
指導者　澤野　さよ子

１　単元名　　作品の世界を想像しながら読み、考えたことを伝え合おう
「教材名：やまなし〔資料〕イーハトーヴの夢（光村図書）」

２　単元の目標
○　比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。（知識及び技能）
○　物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。（思考力、判断力、表現力等）
○　言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。（学びに向かう力、人間性等）

３　指導観
○　本単元は、小学校学習指導要領解説国語編の第５学年及び第６学年「１知識及び技能」の「⑴ク比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。」、「２思考力、判断力、表現力等」の「C読むこと」「⑴エ　人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。」を主として、これらを基に設定している。
　本教材「やまなし」は、かにの親子が「かわせみ」や「やまなし」と出会う様子を通して、「五月」と「十二月」とを対比させながら生と死について考えさせる宮沢賢治の深い思想性をもつ作品であり、独特で色彩豊かな表現や比喩、擬声語・擬態語（オノマトペ）などの表現の工夫も見られる文学的な文章教材である。また、資料「イーハトーヴの夢」は、宮沢賢治の生き方や考え方を紹介した伝記資料で、この資料を手がかりにしながら学習を進めることで、「やまなし」という作品に込められた宮沢賢治の思いについて読み深めることができる。これらのことから、児童が作者の生き方や考え方を手がかりに、物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりするのに適した教材である。
　また、本単元を学習することは、本校の教育目標「自ら学び心豊かにたくましく生きる子どもの育成」の具現化を図る上でも意義深い。
○　本学級の児童は、国語科の学習に積極的に取り組もうとする姿が見られるものの、国語科の学習が苦手で消極的な児童もいる。苦手な理由として、「文章を読むことや自分の考えをまとめることが難しい。」ことを挙げている。また、グループでの話合いでは考えを出し合えるものの、相手の考えを受けて話すことが苦手だったり、全体の場で自分の意見を述べたりすることが苦手な児童もいる。さらに、全国学力学習状況調査結果からも、相手の考えを受けて自分の考えを分かりやすく伝えたり、問われていることに対して、叙述を基に読み取ったりすることが十分でないことが分かった。
　本単元と関わる文学的な文章教材の学習として、５学年で「物語の全体像から考えたことを伝え合う『たずねびと』」、「伝記を読み、生き方を考える『やなせたかし―アンパンマンの勇気』」、「表現の工夫や効果に着目して読む『大造じいさんとガン』」を行っている。また、６学年４月の文学的な文章教材「帰り道」の学習では、視点を変えて読むことで、二人の中心人物の人物像を多面的に読み深める学習をしている。
○　そこで、本単元では、導入で単元のゴール（言語活動：「やまなし」を読み、考えたことを伝え合おう。）を示し、「やまなし」を読む目的を明確にもたせるようにする。そして作品の世界について、場面の様子や登場人物の行動や会話、比喩や擬声語・擬態語等の文章の叙述を手がかりに話し合う活動を通して、物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるようにする。
　第一次では、題名や挿絵から予想される「やまなし」の物語のイメージを自由にもたせた後、物語を聞かせて初発の感想を書かせる。初発の感想は、「心に残った表現」、「疑問に思うこと」、「みんなで考えたいこと」の視点で書くようにし、最初のイメージと比べさせながら「やまなし」への「問い」をもたせ、主体的な学びができるようにしていく。そして、イメージのずれを解決するために、「『やまなし』を読み深める」という学習の見通しをもたせる。
　第二次では、児童の初発の感想を取り入れながら、５学年で学習した「伝記を読み、生き方を考える」学習を生かし、宮沢賢治についての資料「イーハトーヴの夢」を読み、出来事やそれに対する宮沢賢治の行動や心情の叙述を手がかりに、宮沢賢治の生き方や考え方を捉えさせるようにする。

そして、宮沢賢治の生き方や考え方を捉えさせた上で、額縁構造になっている「やまなし」のそれぞれの場面で、「宮沢賢治は、何を伝えたかったのだろう。」という問いもたせ、宮沢賢治の生き方や考え方が投影された作品に込められた思いを、児童の話合いを通して読み深めるようにしていく。

読み深める際は、考える視点として「行動、会話、情景」に着目させ、比喩や擬声語・擬態語等の表現の工夫にも気付かせるようにし、作者の特徴的な描写も大事にしていきたい。その際、資料「イーハトーヴの夢」で捉えた宮沢賢治の生き方や考え方を手がかりに、「やまなし」で表現されている宮沢賢治の思いについて考えさせるようにする。話合いの場面では、ペアやグループ、全体での話合いを適宜取り入れたり、話合いの時間を十分確保したりするようにする。

第三次では、「『やまなし』を読み、考えたことを伝え合おう。」の言語活動を行い、学習したことを基に自分の考えまとめさせ、お互いの考えを伝え合ったり、友達の考えを聞いて自分の考えをさらに広げたりできるようにする。自分の考えを書かせる際には、根拠となる叙述を必ず入れて書くようにさせ、聞き手に分かりやすい内容になるようにさせていく。

特に、本時では、児童が主体的に考えを出し合い、自らの問いを解決できるようにするために、話合いの時間を十分確保し、他者と考えの交流がしっかりできるようにする。また、全体の話合いでは、問い返しの発問を行うことで、児童の考えを深められるようにしたい。

4　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
①　比喻や反復などの表現の工夫に気付いている。	①　物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。	①　進んで物語の全体像を具体的に想像したり表現の効果を考えたりしながら読み、作品を通して考えたことを伝え合おうとしている。

5　単元の指導と評価の計画（全８時間）

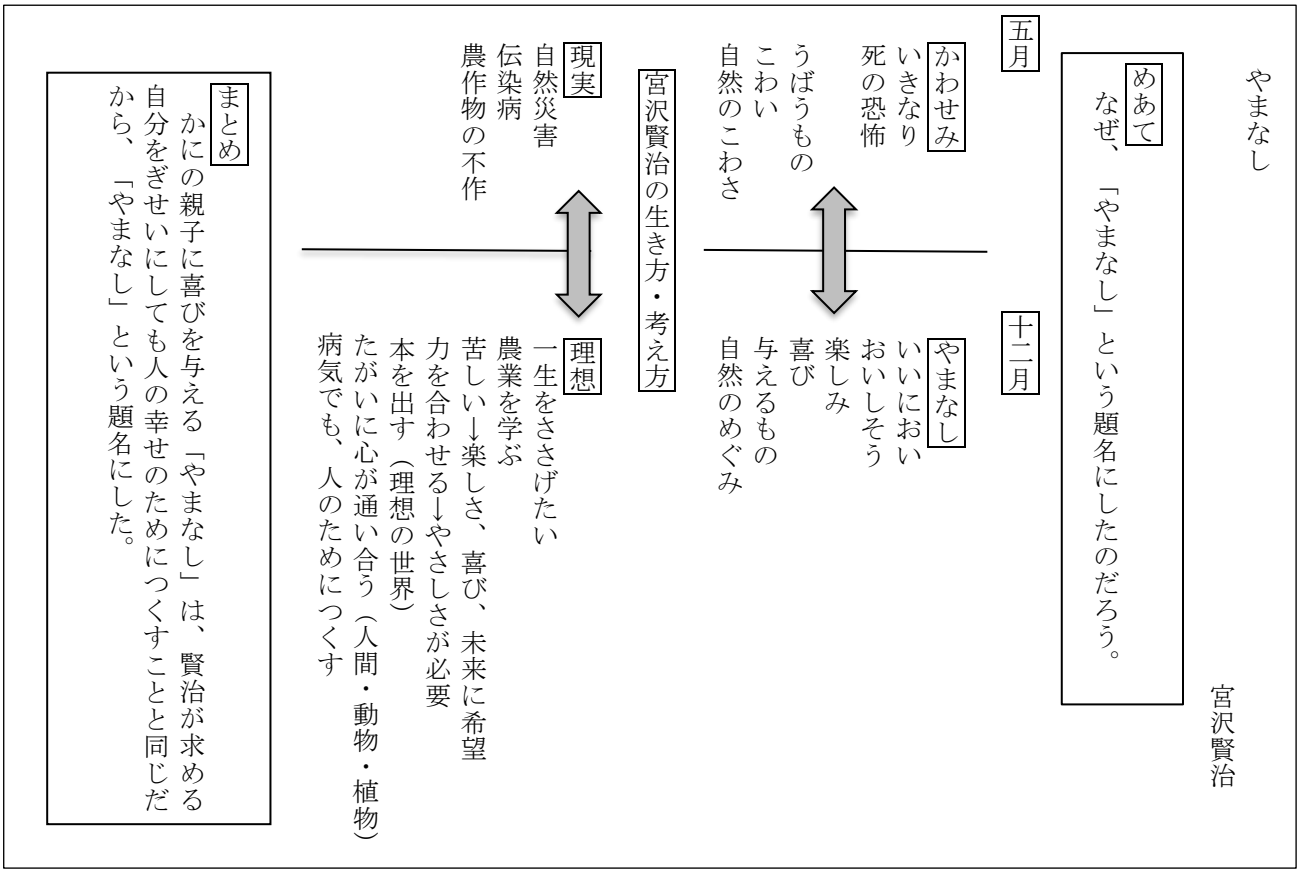
次	主な学習内容及び学習活動	時間	評価（観点） 知技	思判表	態度
第一次	1　「やまなし」を読み、初発の感想を話し合う。 2　単元のめあてを確認して、学習計画を立てる。 ○　単元のめあてについて 作品の世界を想像しながら読み、考えたことを伝え合おう ○　言語活動について ・　「『やまなし』を読み、考えたことを伝え合おう。」 ○　学習計画について	1			
第二次	3　作者の生き方や考え方を手がかりに、「やまなし」を想像しながら読む。 ○　作者の生き方や考え方について（資料「「イーハトーヴの夢」）	2		①	
	○　「五月」と「十二月」の大まかな様子について	3		↓	
	○　「五月」の谷川の様子について	4	①	↓	
	○　「十二月」の谷川の様子について	5	↓	↓	
	○　「やまなし」という題名について ・　「五月」と「十二月」の対比 ・　「かわせみ」と「やまなし」の違い	6 本時		↓	
第三次	4　「『やまなし』を読み、考えたことを伝え合おう。」に向けて、自分の考えをまとめる。 ・　宮沢賢治の生き方や考え方 ・　「やまなし」に込められた思い	7			① ↓
	5　「やまなし」に対する自分の考えを紹介し、単元全体を振り返る。	8			↓

6　本時の目標

○　「五月」と「十二月」の場面を比べ、「やまなし」という題名にした理由を話し合うことを通して、物語の全体像を想像することができる。（思・判・表）①

7　学習指導過程（６／８時間）

段階	学習内容および学習活動	○　指導の手立て◆　評価の視点（方法）	資料・準備
導入 5 分	1　前時の学習を想起し、本時のめあてを確かめる。 なぜ、「やまなし」という題名にしたのだろう。 2　考える視点と学習の進め方を確かめる。 ○　考える視点 ・　かわせみ、やまなし ・　会話　・行動　・情景 ○　学習の流れ ・　個人で→少人数で→全体で	○　学習計画表や、前時までにまとめた「五月」と「十二月」の掲示資料を振り返り、本時のめあてにつなぐ。 ○　「やまなし」という題名にした理由について考えをまとめさせるために、これまでの学習や「会話、行動、情景」などの叙述を手がかりにすることを確かめる。 ○　見通しをもって学習に取り組ませるために、学習の流れを確かめる。	学習計画表 前時までの掲示資料 教材文
展開 35 分	3　「やまなし」という題名にした理由について考える。 ○　「五月」と「十二月」の対比 ○　「かわせみ」と「やまなし」の違い 4　「やまなし」という題名にした理由について全体で話し合う。 ・　「やまなし」は、自然の恵みだから。 ・　「やまなし」が喜びを与えてくれるから。	○　自分の考えをまとめさせるために、「五月」と「十二月」でそれぞれにまとめた谷川の様子や「かわせみ」と「やまなし」の違いなどを基にしながら考えさせる。 ○　自力で解決が図れない児童に対しては、自分なりの解決が少しでもできるように、個別に対応しながら、その児童に合った言葉かけをしたり、友達と話をしたりする機会をもたせる。文章表現が難しい場合は、キーワードとなる言葉に着目させる。 ○　それぞれの児童が自分なりの学び方ができるように、自分の考えがまとまった児童から、友達と考えの交流をさせる。 ○　対話のよさを実感させるために、友達の考えから自分の考えを見直したり、書き加えたりすることも必要に応じてさせる。その際、自分の考えの深まりや広がりを明確にさせるために、加筆は赤ペンでさせる。 ◆　「五月」と「十二月」の場面や「かわせみ」と「やまなし」の違いを比べ、「やまなし」という題名にした理由を話し合うことを通して、物語の全体像を想像している。（思、判、表）①【ノート・発言】 ○　宮沢賢治の生き方や考え方を手がかりに考えを深めさせるために、児童の発言を生かしながら、「『やまなし』という題名ではなく『かわせみ』という題名ではだめだったのか。」などの問い返しの発問をする。	教材文 掲示資料 国語ノート

	・　「やまなし」は、命を与えるものだから。 ・　「やまなし」は、賢治の生き方、人のためにという考え方と同じだから。 5　本時の学習をまとめる。 ㊀　かにの親子に喜びを与える「やまなし」は、賢治が求める自分をぎせいにしても、人の幸せのためにつくすことと同じだから、「やまなし」という題名にした。	○　「やまなし」は、宮沢賢治の生き方や考え方と重なる点があることを捉えさせるために、児童の発言を基に、物語に描かれている対比関係や作品構成が分かるように板書の工夫をする。 ○　読みの深まりを確認させたり、主体的な学習の達成感を味わわせたりするために、板書のキーワードをもとに、個人で学習のまとめをさせる。 ○　考えの交流ができるように、各自が書いたまとめの文を伝え合うようにさせる。	
終末 5分	6　本時の振り返りをする。 ○　自分の考えの深まりについて	○　自己の学びを再認識させたり、学び合いのよさを実感させるために、児童相互の学び合いを視点にし、自分の言葉で振り返りを書かせる。 ○　学びの深まりを認め合えるようにするために、振り返りを紹介できる児童には発表をさせる。	国語ノート

8　板書計画